

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

津軽半島の西側、岩木川が日本海へと流れ出る手前に十三湖がある。十三湊遺跡はその西側の砂洲上に、福島城は北岸の台地上にそれぞれ位置している（第2図、3図）。現在は共に青森県北津軽郡市浦村に属しているが、1955年の合併による市浦村成立以前は、福島城は北津軽郡相内村、十三湊遺跡は西津軽郡十三村に属しており、両者は必ずしも常に一体の地域に属していたわけではない。

この地方が日本という国家に組み込まれたのは遅く、前九年・後三年の役を経た後の12世紀、奥州藤原氏の時代からと思われる。十三湊である程度遺物が見られるようになるのもこのころからである。そして鎌倉期にいたり、北条氏の被官安藤氏が蝦夷管領（蝦夷代官）に任じられ、この地方と蝦夷の管轄に当たることが知られている。民族としての蝦夷の問題についてはここではあえて触れないが、この地方にアイヌ語地名が多く見られることは注意すべきであろう。十三湊の「トサ」の語源は「トー・サム（湖・の傍）」というアイヌ語であるとする説が有力であり〔金田一1932, 山田 1989〕¹⁾ 十三湊の北に見える秀麗な三角形の霧山も、モ・イワ（小さい・（神の住む）山）というアイヌ語地名に由来すると言われ、この付近一帯にはかつてアイヌ語を話す人々が広範に居住していたことは間違いなく、それは十三湊・福島城といった遺跡が成立した歴史的前提としても見逃すことのできない条件であったと思われる。

津軽地方は、捺文文化など考古学的に知られる面でも北海道とも密接な関係があり、歴史的に、中央の権力が及び難い時代には、北海道側と強く結びつく傾向があったようである。

南北朝～室町期には、中央の権力の低下と相俟って安藤氏が大きな勢力を持ったようだが、この間の歴史については信頼しうる文献が非常に少なく、具体的な様相は知りたい。ただ、永享4年（1432）には安藤氏が南部氏に敗れてエゾガ島（北海道）へ逃げるといった事件のあったことは間違いなく（『満濟准后日記』）、十三湊もこの頃を境に衰退に向ったらしい。その北方へのターミナルとしての機能と繁栄は、上ノ国勝山館など北海道側に引継がれたのであろうか。

次に遺跡について述べると、十三湖北岸の標高約20mの台地上に位置する福島城は、1955年の東京大学東洋文化研究所の調査の時点では大部分が原野だったようだが、その後植林と耕地化が進み、現在は林・畑・荒地が混在している。内郭部分は営林署の苗圃、畑などとして利用され、一時高等学校の校舎も置かれていたが、調査時点では特に利用されていなかった。

周辺の遺跡としては、まず、福島城の西北に接するオセドウ貝塚などの縄文時代の遺跡が著名だが、福島城に関係するものとしては、蓬田町の蓬田大館〔櫻井清彦ほか 1987〕、中里町の中里城〔齋藤純 1990, 1991, 1992〕、市浦村磯松の古館（墳館）〔1993年に市浦村によって部分的な発掘調査が行われた〕など、10～11世紀ころの築造とされる城館ないし丘陵上の集落遺跡が多



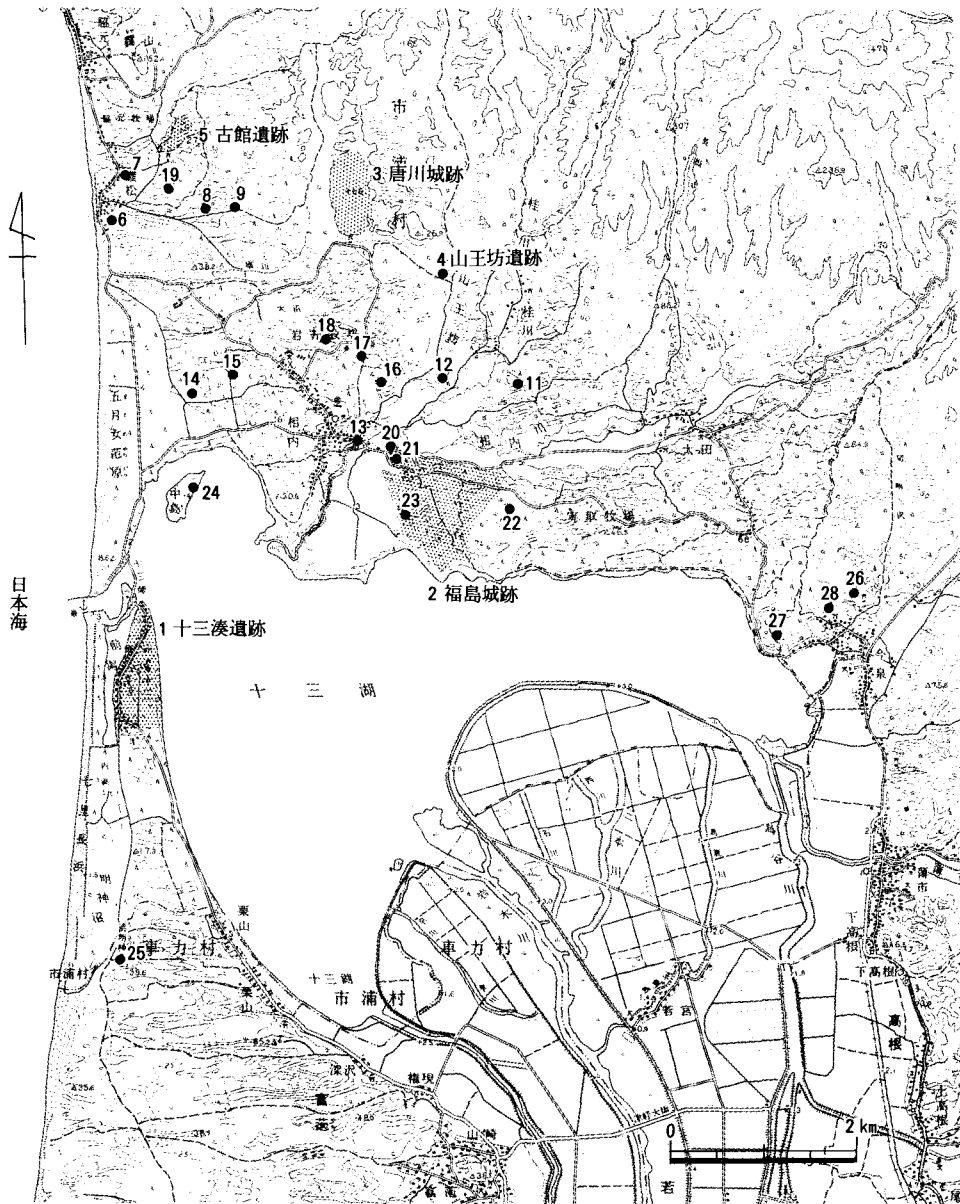
第1図 北東アジアのなかの日本列島と福島城・十三湊



第2図 福島城・十三湊周辺の古代末・中世の主要遺跡地図

第1表 福島城・十三湊周辺の古代末・中世の主要遺跡一覧

番号	遺跡名	所在	時代	種類	参考文献
1	福島城跡	青森県北津軽郡市浦村	10後～11	城址	江上波夫・関野雄・櫻井清彦1958『館址—東北地方における集落址の研究』, 東洋文化研究所。
2	十三湊遺跡	青森県北津軽郡市浦村	12後～15中	都市	千田嘉博ほか1993『福島城・十三湊遺跡1991年度調査概報』『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集。
3	蓬田大館	青森県東津軽郡蓬田村	10後～16	城館	櫻井清彦・菊池徹夫編1987『蓬田大館遺跡』, 早稲田大学考古学研究室。
4	蓬田小館	青森県東津軽郡蓬田村		城館	櫻井清彦『青森県小館遺跡の調査』『考古学ジャーナル』62。
5	尻八館	青森県青森市	14～15	山城	三上次男ほか1981『尻八館』, 尻八館調査委員会。
6	内真部(4)遺跡	青森県青森市	11後～15	集落	青森県教育委員会1994『内真部遺跡(4)』青森県埋蔵文化財調査報告書第158集。
7	油川城	青森県青森市		城館	
8	浪岡城	青森県南津軽郡浪岡町	15～16	城館	浪岡町教育委員会1987～1989『浪岡城跡』I～X。
9	中崎館遺跡	青森県弘前市	12後	城館	青森県教育委員会1990『中崎館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第129集。
10	境関館遺跡	青森県弘前市	13前～16	城館	青森県教育委員会1987『境関館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第102集。
11	根城	青森県八戸市	12中～17初	城館	八戸市教育委員会1979～1989『史跡根城発掘調査報告書』I～X。
12	矢立廃寺	秋田県大館市	12後	寺院	大館市教育委員会1987『大館市矢立廃寺発掘調査報告書』。
13	エヒバチ長根窯跡群	秋田県二ツ井町	12後	窯跡	二ツ井町教育委員会1990『エヒバチ長根窯跡・大川口館跡・鳥野遺跡』二ツ井町埋蔵文化財調査報告書第1集。
14	隠内館	北海道松前郡福島町	15	城館	
15	志苔館	北海道函館市志海若町	15前	城館	函館市教育委員会1984～1985, 1986『史跡志苔館』I～II, 『史跡志苔館』。
16	勝山館	北海道松山郡上ノ国町	15～16	山城	上ノ国町教育委員会1980～1990『史跡上ノ国勝山館跡』I～X。
17	夷王山墳墓群	北海道松山郡上ノ国町	15～16	墳墓	上ノ国町教育委員会1991, 1984『夷王山墳墓群』『夷王山墳墓群II』。
18	花沢館	北海道松山郡上ノ国町	15	城館	
19	洲崎館	北海道松山郡上ノ国町	15	城館	
20	瀬田内チャシ	北海道瀬棚郡瀬棚町	17～18中	チャシ	瀬棚町教育委員会1980『瀬田内チャシ跡発掘調査報告書』。
21	二風谷遺跡	北海道沙流郡平取町	17前	集落	北海道埋蔵文化財センター1987『ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡』。
22	大川遺跡	北海道余市郡余市町	14～15	集落	北海道余市町教育委員会1993, 1994『1992年度大川遺跡発掘調査概報』『1993年度大川遺跡発掘調査概報』。



番号	遺跡名	所在地	時代	種別	番号	遺跡名	所在地	時代	種別
1	十三湊遺跡	市浦村十三	中世, 近世	散布地	15	五月女范(2)遺跡	市浦村相内字相内	縄紋	散布地
2	福島城跡	市浦村相内字実取	平安	城跡	16	笹畑遺跡	市浦村相内字岩井	縄紋中期	貝塚
3	唐川城跡	市浦村相内字岩井	平安	城跡	17	ニッ沼遺跡	市浦村相内字岩井	縄紋晚期, 平安	散布地
4	山王坊遺跡	市浦村相内字岩井	平安	墳墓	18	岩井遺跡	市浦村相内字岩井	縄紋後・晚期, 平安	集落跡
5	古館遺跡	市浦村磯松字磯野	縄紋, 平安	散布地	19	大沼遺跡	市浦村相内字岩井	不明	散布地
6	磯松砂山遺跡	市浦村磯松字磯野	縄紋	散布地	20	露草遺跡	市浦村相内字露草	平安	散布地
7	磯松遺跡	市浦村磯松字磯野	平安	墳墓	21	オセドウ遺跡	市浦村相内字露草	縄紋前・中・後期	貝塚
8	唐川(1)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	集落跡	22	実取遺跡	市浦村相内字実取	平安	集落地
9	唐川(2)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	散布地	23	蛇石遺跡	市浦村相内字岩井	縄紋後・晚期, 平安	散布地
10	唐川(3)遺跡	市浦村磯松字唐川	平安	散布地	24	中島遺跡	市浦村十三字土佐	平安	散布地
11	ナガレ山遺跡	市浦村太田字山/井	縄紋, 平安	散布地	25	明神遺跡	車力村大字富范	中世	神社跡
12	赤坂遺跡	市浦村相内字赤坂	平安	集落跡	26	唐崎遺跡	中里町今泉字唐崎	平安	散布地
13	相内遺跡	市浦村相内字相内	平安	祭祀跡	27	今泉大石崎遺跡	中里町今泉字高崎	縄紋, 平安	散布地
14	五月女范(1)遺跡	市浦村相内字相内	縄紋晚期	散布地	28	神明宮遺跡	中里町今泉字唐崎	不明	城跡

第3図 十三湖周辺の遺跡地図 (縮尺1/80000)

く検出されていることが注意される。構造から見てこれに類すると思われる遺跡はさらに多く、先述した律令国家との抗争・包摂に関わる政治史の過程にも関わる問題と思われる。後に述べるように、福島城は実はこの頃の築造である可能性が高く、おそらくこれらの遺跡群と密接な関連を持った遺跡であったと考えられるのである。

中世安藤氏に関わるとと思われる遺跡としては、まず福島城の北約2kmの谷あいには山王坊遺跡があり、発掘調査によって、14～15世紀頃の大規模な宗教施設であることが確認されている〔加藤ほか1987〕。山王坊の西側、標高160mの山上には唐川城があり、山王坊との位置関係や、十三湊を見おろす立地からも、安藤氏に関わる遺跡の可能性が考えられる。この他周辺では、小泊村間柴鼻の柴崎城、青森市後湊の尻八館などが関連する中世の山城として注目される。

十三湊は、十三湖の西側に発達した半島状の砂洲の上に位置し（以下「砂洲」とする）、西側は「前瀨」と呼ばれる瀨湖（かつての岩木川最下流の一部）と、さらに七里長浜を隔てて日本海に面している。中世段階では、南方の湊明神宮付近が日本海への出口（水戸口）であったが、湊の衰退と共に水戸口は次第に北に位置を移し、現在ではかつての港とは全く無関係に、単なる排水口としての水戸口が十三湊のある砂洲の北端付近に開けられて、かつての水路は三つの小湖沼（前瀨、内湖、明神沼）となっている。近世にも鯿ヶ沢、深浦、青森と共に弘前藩の四浦の一つに教えられ、岩木川水運の中継港として相当の機能を持ったが近代に入って衰退し、現在ではシジミ漁を中心とする漁業のみが行われている。

もっとも、戦後の食糧難の時代には、江差など北海道からの魚を積んだ船が入港し、岩木川流域の米を積んだ船が十三湊で交換を行っていた由であり、特に国家的な統制が弛緩した時代には、北方との貿易が自然に行われる条件を備えた場所であったと思われる。

遺跡としては、輸入陶磁器などの散布が知られ、琴湖岳遺跡、鉄砲台遺跡、湊迎寺遺跡といった部分的な個別の遺跡の形で認知され、半島を縦断するバイパス道路の建設の際、および十三小学校校舎改築の際には発掘調査も行われている〔村越 1975, 新谷ほか 1988〕。また、十三湊南方の字通行道の通称「インキョ（隠居）」に存在する寺院址（檀林寺）とされるが、根拠はない）でも発掘調査が行われている（第7章第4節参照）。

十三湊に直接関わる遺跡としては、この他さらに南方2kmほどの湊明神宮が重要であると思われる。現在も「出船入船の明神」として漁業関係者の信仰を集めているが、中世段階での日本海への出入口（水戸口）付近の丘陵に位置することから、港の守護神であると共に、灯台のような港湾機能の一部も担っていたのではないかと想像される。境内からは幕末に百体以上の懸仏などが出土しており、相当規模の宗教施設があったことがうかがわれる（第3章第1節参照）。

〔小島道裕：国立歴史民俗博物館歴史研究部
榊原滋高：市浦村学芸員、国立歴史民俗博物館特定研究協力者〕

注

- (1) 菅江真澄は『外ヶ浜奇勝』の中で「等散は十三の湖をいふ」と記しており（寛政8年6月10日条天注）、当時「トーサン」というアイヌ語的な発音が生きていたことを示すのではないと思われる。「十

三」という文字が宛てられたのも、この発音の故であろう。

なお、「十三」の「トサ」と「ジュウサン」という二つの読みの関係については、第7章第3節で長谷川成一が詳述している。

参考文献

- 新谷雄蔵ほか 1988『琴湖岳遺跡』市浦村教育委員会。
- 加藤 孝ほか 1987『青森県北津軽郡市浦村 山王坊遺跡 昭和57年度～昭和62年度調査中間報告』市浦村教育委員会・山王坊跡調査団。
- 金田一京助 1932「北奥地名考」『金沢博士還暦記念東洋語学の研究』三省堂、『金田一博士喜寿記念アイヌ語研究 金田一京助選集Ⅰ』三省堂, 1960。
- 齋藤 純ほか 1990『中里城跡Ⅰ』中里町・中里町教育委員会。
1991『中里城跡Ⅱ・平山西』中里町教育委員会。
1992『中里城跡概報』中里町教育委員会。
- 櫻井清彦・菊池徹夫 1987『蓬田大館遺跡』六興出版。
- 豊島勝蔵ほか 1983『市浦村史』第一巻, 市浦村。
- 村越 潔 1975「十三琴湖岳遺跡」『日本考古学年報』第26号。
- 山田秀三 1983『アイヌ語地名の研究』第3巻, 草風館。
同 1989「津軽のアイヌ語地名」菊池徹夫・福田豊彦編『よみがえる中世 4 北の中世津軽北海道』平凡社。